

駒場と本郷

加藤 栄（植物学教室）

駒場の教養学部で15年間お世話になり、昨年4月から植物学教室に戻ってきました。大学院の途中で新しく出来た生物化学科に移ったので、植物学教室のメンバーになったのは31年目のこととなります。理学部2号館の外観は昔と同じですが、内部はすっかり変わっていました。勿論、学生時代に教わった先生方は一人も居られず、教室の運営の仕方も全く新しくなっていました。

同じ大学の中でも、所が変わるといろいろ違っている点が多く、面白いと思います。始めて理学部の教授会に出て吃驚したことが二つあります。一つは定刻通りに人が集まり会議が始まっていたことです。人数の多いせいもあるでしょうが、教養学部ではこのようなことは全く経験したことがありません。このため新任教官として紹介される日であるのに遅刻してしまいました。二つ目は、教授会の途中でおやつが配られたことです。これは全く予想もしていませんでした。教養学部では机の上のお茶を自分で勝手に入れて飲むだけです。

教授会の長さは、理学部の方が長いように感じます。一つの理由は、ここ1～2年駒場ではジャーナリズムを賑わした問題をはじめとしていろいろな出来事が多く、熱の入った議論がかわされる教授会が続いたことにあります。学部長は大変だったでしょうが、出席していて時間を忘れて聞いていることも多く、なかなか面白い教授会だったと思います。幸か不幸か、理学部ではまだこのような経験はありません。

駒場のキャンパスにはまだ植物の種類も多く、野生も若干残っています。雨の日のヒキガエル、夏の蚊、一年中居るカラス、そして時にはヘビにもお目にかゝれます。本郷では三四郎の池の囲りを除くと、緑が広がるのは新装なったグラウンドの

人工芝だけで、建物ばかりのキャンパスといった感じですが、動物もネコとハト、あと多いのは自動車ばかりです。たゞ2号館の囲りのケヤキは立派で、葉が着いている今も、また葉が落ちてしまった後の枝ぶりも見ていて飽きることがありません。

駒場ではスペースの狭さに苦労しました。しかし本郷でも同じ苦労があることが分かりました。それは理学部広報の3月号の“こんなに狭い理学部の建物”という記事で紹介されている通りです。部屋の中だけでは収納しきれず、いろいろな物を廊下の両側に並べているのは駒場と同じです。少し違うのは、建物が古いため廊下が広く、収用能力が若干大きいことだけです。どうしても理学院および教養学院計画を実現させるしか解決は無いです。たゞ、これ以上建物が増えて緑が減るのは困るという思いが残ります。もっと根本的な解決を21世紀にかけて考えなければならぬでしょう。

東大の学部学生の半分は駒場に居る訳ですが、教養学部でどういう教育が行われているかを余り御存知無の方が本郷には多いように感じます。時折、“教養課程の生物で何を教えているのか、進学してきた学生は基礎的なことを何も知らない”というお叱かりを受けたことがあります。しかしその基礎的というのが問題で、多くの場合、御自分の専門分野での基礎であり、一般教養の生物からみるとかなり専門的であることが多いようです。理Ⅱや理Ⅲでも、生物学は週1回、半年つゞく講義が3つあるだけで、基礎の基礎を教えることしかできません。また進学振分けの制度についてもいろいろ御質問を受けます。理学部の場合には人気のある学科が多く、このため成績により目的の

所に進学できなかつたり、逆に成績のみによって進学する所を決めたりすることもあるようです。しかしいわゆる縦割り制にして入学時に専門を決めるとなると弊害はもっと大きくなります。受験産業のコンピューターによって各教室に学生が割り当てられるという事態さえ起きるかも知れません。入学してから1年半の間、自分の将来や進む方向について考える時間があることは大切なことだと思います。最近、教養（学）部の廃止が議論されはじめていますが、一部の弊害だけでなく、全体として+か-かを慎重に判断することが必要だと思います。

本郷に比べ、駒場の先生方は3～4倍の授業負担があります。それにもかかわらず、本郷に移って50%は忙がしくなったというのが実感です。駒場でも会議は多く、教室主任とか、特定の委員会の委員になると大変です。しかし理学部ではヒラの教官でもいろいろな用が多すぎます。1つの大きな理由は（委員会の数×開催回数）の積が大きいかからだと思います。植物学教室に来て感心したことは、教室内のいろいろな委員会の数は結構ありますが、開く回数と、開催している時間をかなり詰めてあることです。例えば大学院の専攻会議

は通常年に4回しか開かれませんが、大ていのは専攻主任が、事務の鈴木さんの手を借りて処理しています。その代り、専攻会議にはほぼ全員の担当教官が出席され、重要な案件を熱心に議論します。教養学部にはほぼ倍の回数の専攻会議に出席していましたが、年に3～4回の会議が減ったこととなります。理学部でも学部長が委員会の多いことを気にしておられ、いろいろ考えておられます。もし委員会の数を減らすことができなければ、開く回数を少なくすることも考えてみる必要があるのではないのでしょうか。このためには、長の肩書きの付く方々にある程度の権限を持っていただき、前例に従って処理できることは会を開かなくても決定できるようにすることです。勿論、適当なチェック機能があることが前提です。民主々義では手続きが大切ですが、民主的に選ばれた人を信頼して物事を委ねることは非民主的では無いと思います。少なくとも日常業務的な委員会はこのようにして開催回数を減らすことができるはずで、その分研究や教育により多くの時間を向けることができます。今年は夏休みになっても何かと用が多く、駒場もいゝなあとと思っています。